

***射場天体観測所の望遠鏡の一部を発見**

アーカイブ室新聞第693号(2013年8月30日)に「射場天体観測所一覧を収蔵—その2—」という記事を書いた。射場天体観測所は昭和3年(1928年)、神戸市に射場保昭氏によって設立された私設天文台である。射場天体観測所の機材は当時の天文観測機材としては内外でも有数のものであった。それら射場天体観測所の一切が1946年に東京天文台に寄贈された。しかし、東京天文台から改組された国立天文台ではその機材が星図の一部を除

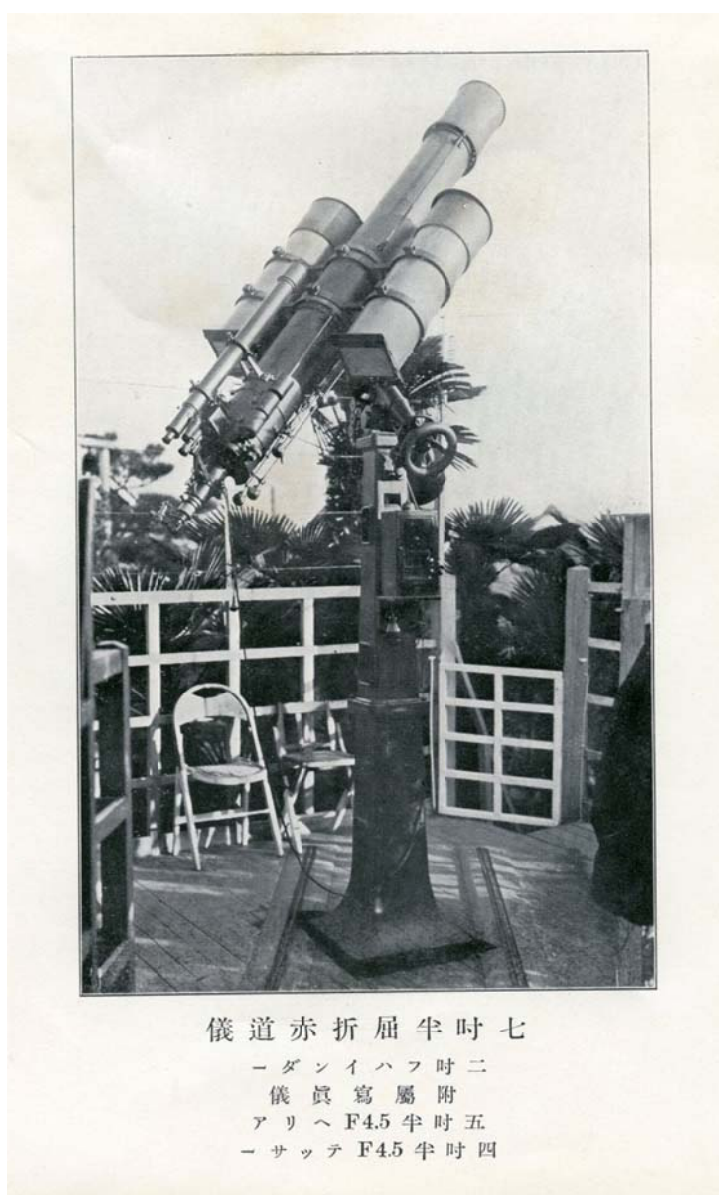


写真1 7吋半屈折赤道儀

き、全く残っていないのである。その痕跡すらないということは非常に不可解なことである。写真1は、射場天体観測所一覧の第1ページに掲載された7吋半赤道義望遠鏡である。

アーカイブ新聞 692号(2013年8月29日)に書いたように、2013年7月になって、国立科学博物館の西條氏から射場天体観測所の機材の一部が川崎にあるらしいという情報が入ってきた。京都大学総合博物館で「射場保昭展」が検討されており、射場保昭氏について情報が集められていたのであろう。大阪市立科学館の嘉数次人氏からの情報で射場天体観測所の機材の一部が川崎の科学館にあるというのである。そこで2013年8月22日、国立科学博物館の洞口、中島氏と川崎青少年科学館に調査に出かけた。川崎青少年科学館では国司氏のお世話で射場天体観測所から東京天文台に寄贈された望遠鏡が川崎天文同好会の箕輪敏行氏から川崎市に寄贈されたという望遠鏡の一部を見せていただいた。

射場天体観測所の機材一切が1946年に東京天文台に寄贈されたが、現在ではその所在が明らかでない。射場保昭氏の御次男の射場満家氏がお父上から聞いた話では、姫路出身の東京天文台の先生と寄贈についての相談がなされたということから、東京天文台への寄贈にあたっては、広瀬秀雄氏が窓口で行われたようである。アーカイブ室新聞第662号では、これらの機材の一部が流星写真儀に転用されたという情報をもとに記事を書いた。今回は川崎青少年科学館での調査について報告したい。

川崎青少年科学館に保管されていたのは、写真1の7吋半屈折赤道儀望遠鏡の赤道儀の一部のようであった。射場天体観測所の7吋半屈折望遠鏡の赤道儀は背が高いのであるが、川崎青少年科学館の倉庫に保管されていた赤道儀はそれほどの高さがなかった(写真2、3)。



写真2



写真3

写真 2 がドイツ式赤道儀のコラム部分であり、写真 3 が赤経赤緯軸及び望遠鏡取付台部分である。この赤道儀には 20 cm 反射望遠鏡(写真 4)が載せられていたようで、川崎に持ち込まれた時点で 7 吋半の屈折望遠鏡はなかったようである。この赤道儀に 20 cm 反射望遠鏡が載せられた状態で川崎青少年科学館に川崎天文同好会の箕輪敏行氏により寄贈され、現在、川崎市の文化財に登録されているとのことであった。箕輪敏行氏ご自身が東京天文台の富田弘一郎氏から譲り受けたと話されていたことから、この赤道儀が射場天体観測所から東京天文台に寄贈されたものの一部であることは確かなようである。



写真 4 載っていた 20 cm 反射望遠鏡

写真 1 の赤道儀のコラムは 2 段に繋がれており、川崎青少年科学館に存在する赤道儀は、その上段部分と思われる。射場観測所一覧の 7 吋半屈折赤道義望遠鏡の欄には機械部分は西村製作所製であると書かれており、川崎青少年科学館の赤道儀のコラムには写真 5 の名盤が付いていた。



写真 5 西村製作所の名盤

写真 1 でみると、射場天体観測所での 7 吋半屈折赤道義望遠鏡は重錘式のガバナーによる運転時計駆動であったが、川崎青少年科学館にあった赤道儀はモーター駆動に改造されていた。

射場天体観測所の機材の一部を発見できたことは、国立天文台でアーカイブをやっている者にとって非常に幸運であったと思っている。このことについて情報を寄せてくださっ

た大阪市立科学館の嘉数次人氏、国立科学博物館の西條恵一に感謝する次第である。

これらアーカイブ室新聞の記事にお気づきのことがあれば、編集者中桐にご連絡いただければ幸いです。中桐のメールアドレスは、arcnaoj@pub.mtk.nao.ac.jp